

1 単元名 たどってみよう「戦争への道・終戦への足跡」

2 単元目標

- ・様々な戦争の傷跡や戦争に至った時代背景を、一人調べや聞き取りを通して進んで調べようとする。(関心・意欲・態度)
- ・戦争の経緯や人々がおかれた戦時下の状況について調べ、どのような時代背景のもとでそれらが行われたのか、なぜ戦争に反対しなかったのかを考えることができる。(思考・判断)
- ・校区史や文献資料、年表などを活用しながら、校区の方への聞き取ったこと、戦争の経緯や人々の生活の様子をまとめることができる。(資料活用能力・表現)
- ・戦争により多くの人たちが被害を受けたことを理解し、平和に対する思いを深め、過去に学び、将来の生き方にいかすことができる。(知識・理解)

3 単元設定の理由

(1) 児童の実態とめざす子ども像

新川校区は市の中心部に位置し、豊橋の発展を振り返ることができる史跡や文化財も多い。戦時中、空襲に見舞われ多くの建物が消失し被害が甚大であった地域でもある。戦後の復興によりそれらを物語るものは少なくなったが、戦争や空襲を体験した方は比較的多く暮らしている。本学級の児童でも、三世代以上で住んでいる子ども24人中16人いる。核家族でも、近所や校区内に祖父母が住んでいる子ども4人を数える。学校教育に協力的なお年寄りも多い。しかし、祖父母や多くのお年寄りの方々と生活を密にし、昔の話を聞く機会はあると思われるが、空襲により焦土と化した校区の過去については子どもたちにはあまり知られていない。語られていない。三世代で暮らす割合が高く、比較のお年寄りが多く住む新川校区でも、豊橋空襲などの戦争の記憶は確実に風化している。

子どもたちの戦争認識についての実態調査からそれがわかる。「悲惨なこと、人々が悲しむ」「原爆が落とされ多くの人が亡くなった」「食べ物不足で貧しい暮らしになった」「アメリカに負けた」など感情論や表面的で漠然としたものが多い。メディアや書籍などを通しての思いであろう。豊橋・地域と関連させて考えた子は2名だけであった。この8月、ロシアとグルジアが大規模戦争に発展する危機があったが、誰も知らない。イラク戦争は1人だけ知っていた。戦争とは遠い外国での出来事、自分とは関係のないものと捉え認識は薄い。ゲームの世界かもしれない。戦後生まれの人、子どもは総じて抽象的な捉えしかないのである。こうしたことから、授業ではより具体性をもたせる必要がある。戦争の遺物、傷跡を見たり、体験者から具体的な話を聞いたりしながら戦争をより身近なものに感じさせたい。身近に感じることで追究意欲が高まり、平和な未来を築いていこうとする子どもたちにとって意義深い学習になると考える。聞き取り調査など間接的な体験活動をしたりすることを通して、正しい歴史認識を積み上げていく必要がある。史跡や文献だけでなく、校区にたくさんいる戦争を体験したお年寄りの方々とふれあう機会を多くもたせ学習を展開したい。

それらを戦争に至った時代背景や、満州事変から日中戦争、太平洋戦争と15年にわたって戦争がつづき、日本国民やアジア、太平洋に住む人々に大きな被害をもたらした事実と関連させながら考えることで、平和の尊さを実感し、戦争のない世の中を築こうとする社会に、主体的にかかわっていこうとする人になってほしいと考える。

(2) 教材観

戦争は時代の流れとともに風化しつつある。しかし、太平洋戦争を含む先の戦争は近代史であり、原爆記念日や終戦の日などがメディアで取り上げられることもあり、子どもたちにとって比較的関心のわきやすい時代であると考えられる。そこで、身近な地域素材を取り上げることで抽象的で、遠い世界の出来事から具体性のある身近なものへと意識を変えたい。身近なものや人に直接ふれたり、「校区史」を通して地域の歴史をより身近に感じることで「こんなところにも戦争の傷跡があったんだ」「新川の人でも大変な時を生きてきたんだ」という驚きにより知的好奇心がふくらみ、追究意欲も高まるであろう。

18連隊がおかれた豊橋は、軍都と呼ばれた時代もあり、空襲で大きな被害を受けた。その結果「人」や「もの」に多くの傷跡を残している。「もの」として一番身近なのは「新川小学校」であろう。学校時代も戦争の影響を受けている。終戦間際には、軍の管理するところとなった。空襲により一部延焼。その後、校区で多くの赤痢患者も発生し、校舎は臨時の病院となっている。空襲により古くからの市街地はほとんど被災した。多くの方が亡くなっている。今の神明公園から豊橋駅まで見渡せたという。大手通りの西側、神明公園に老舗「魚町弘文堂」があった。昭和20年5月下旬から大手通りの西側一帯は「建物強制疎開」が実施され、新川校区内では423棟の建物が壊された。「魚町弘文堂」もそのひとつである。現NTTあたりに軍の施設があり、空襲時の延焼を防ぐためだといわれている。思いが詰まった我が家を持った多くの「人」の心にも深い傷跡を残したであろう。家族や友人を失った傷跡、軍主導のもと「勝つ」と信じ協力したり、我慢したり、出兵したりした人にとって敗戦も大きな傷跡となったに違いない。

戦後63年がたち、その傷跡を具体物、「もの」としてふれることは難しい。そこで、当時のことを知る人に話を聞くことが有効となってくる。家族、親戚、近所のお年寄りの方の話を聞かせたい。追究を深めたり、子どもたちの思いをゆさぶったりするために、必要に応じて当時を生きた校区の方々に話していただきたい。当時の状況はもちろんのこと、一個人としての思いを言える範囲内でお話していただく。子どもたちは表情を見ながら三人の方に寄り添い、共感的に聞くことで、戦争を具体的に捉えることができると思われる。

当時を知る「もの」として写真を見たり、校区史の具体的な資料、文献にふれたりすること、日頃見過ごしている石碑や史跡案内板を見に行ったりすることも具体性をもたせる上で有効であると考えられる。墓石には亡くなった方の名前と没日が刻まれている。墓地へ出向くことも戦争を具体的に実感できるひとつの手立てである。水とんやイナゴを食することは、我慢を強いられた生活を体感できる。校区内で多数撮影された映画「早咲きの花」は、子どもたちにとって身近なものであり、当時を知ることができる視聴覚教材として使用したい。

戦争は、自国だけでなくアジア諸国にも甚大な被害をもたらしている。アジア諸国の被害を通して戦争を考えることで、これから

の自分の生き方、あり方を考えさせ、平和な世の中をつくる者としての資質を高めさせたい。

(3) 指導観 追究の仕方 個の追究 話し合いの場

「戦争で生活が苦しくなる」「人々が悲しい思いをする」「多くの人が亡くなる」だから「戦争はいけない」では、これからの日本や自分のあり方を考える時、「戦争反対」という思いだけが先行してしまい具体的な社会とのかかわり方が見えてこない。なぜ、戦争に至ったのか、どうして戦争をつづけたのか、戦争に反対しなかったのか、といった明確な課題をもち、事実認識を積み上げ、それを時代背景と関連させながら考えることで、めざす子どもの姿に迫ることができる。そのために、個の追究の場を保障し、必要に応じてグループで追究したり、全体で話し合ったりしながら学びの共有化を図ることで学習課題に迫らせたい。

「なぜ戦争に反対ではなかったのか」については、次の4人の方に登場していただきながら考えを深めたい。

○ 建物疎開を強いられ弘文堂鈴木さん(旧姓) *校区史に紹介されている

歴史ある弘文堂は、建物疎開を軍に命じられ取り壊しを迫られる。従わざるをえず、現神明公園敷地に大きく構えていた建物は一瞬にしてこわされてしまう。懐かしい我が家の大黒柱にしがみついて涙した。軍の命令に反対するなど、全く考えなかった、考えられなかったという。現在は、神明町南側で、老舗の筆屋「丸弘」の商いに携わっている。

○ 師範学校在学中で、軍国主義時代の学校の様子を小川さん

学校教育に理解があり、歴史学習の講師として現在も活躍中。戦中は師範学校在学、終戦後、公立学校の先生となる。当時の豊橋の様子や空襲の悲惨さを知る。水とんづくりやイナゴの佃煮など、当時の食生活をよくご存知であり協力していただく。戦時中の教育と戦後の民主主義教育の違いにとまどった経験もある。

○ 特攻隊を志願しながら、山口県大竹で終戦を迎えた梅田さん

○ 豊川海軍工廠で働いていた忠内さん

海軍工廠の空襲を体験。友人を亡くす。現在病気のため入院中であるが、この夏休み、地域のイベントで戦争体験を語っている。その様子をビデオを通して視聴し、空襲のおそろしさを学ばせたい。また、入院中にもかかわらず、どうして戦争体験を語られたのか、忠内さんの思いにも迫らせたい。

当時、異なった立場の方々に出会わせることは、当時の状況を多角的に捉えることができ、客観的な見方で「戦争の事実」に向き合うことができると考える。当時の状況を生の声で聞くことで、過去に学び、同じ過ちを繰り返さないことを強く思うきっかけになればと考える。また、生の声を聞くことで、平和の尊さを実感し、自分の将来の生き方を考えるきっかけになってほしいと願う。

4 単元構想

昭和20年と今を比べてみよう①(発表)



昭和20年 札木町付近の写真



平成20年

- ・今と全然違うね。
- ・建物が壊れている、焼けているみたいだ
- ・戦争中、空襲があったんだよ

- ※ 白黒写真で見にくい点は細かく吟味させる。
- ※ 総合学習の既習の内容と関連させる。

地図にまとめてみよう

- ・校区の半分以上が焼けてしまったんだね。



*校区史を見てみよう

- ・空襲で逃げ場をなくした人たちが半呂用水に飛び込んだようだ。
- ・それでも川は熱くなり、熱湯の川になってむしく死んでいった人がある。
- ・学校も戦争の影響を受けていたんだね。新川は空襲の被害を受けていたんだね。

- ※ 地域に残る当時のものを紹介し、戦争があったことを認識させる

新川も戦争の被害を受けていたんだね。もっと調べたい

戦争の傷跡を探ろう。②③(一人調べ)④(発表・見聞)

<おじいちゃん・おばあちゃん・近所の方>

- 子どものころ、生活がとても苦しかったよ
- 親戚の人が、戦争で亡くなっているよ
- <龍拈寺 被害を知らせる立て札>
- 戦争で山門を残して消失したんだね
- <魚町 弘文堂さん*校区史>
- 昔は神明公園にお店があったんだって。移転したんだね。

<豊橋公園・向山公園・墓地>

- 営門、石碑が残っているよ
- <新川小学校>
- 戦争で焼けているよ。
- 空襲後、臨時の病院になった
- 地図にまとめてみよう
- ・多くの死者が出ている
- ・文化財・民家が大きな被災した

他の地域はどうなの？日本全体では？

- ・名古屋、東京、大阪で大空襲があった
- ・広島、長崎に原爆が落とされた。
- ・兵士、民間人で計310万人の人が亡くなった

- ※ 家の人に聞いたり、文獻・校区史、などから調べたりさせる。調べたことは、全体でひとつの地図にまとめ、その大きさを実感させながら切実感をもたせる。

近くに戦争の傷跡がたくさんあった！日本全体でも多くの方が亡くなっている。多くの人が犠牲になる戦争を、どうしてしたのかな。

どうして戦争をしたのだろうか？なぜ、戦争になったの？⑤⑥(一人調べ)⑦(話し合い)

いつごろ始まったんだろう。

- ・昭和6年 満洲事変を起こしたよ。
- ・昭和7年 満洲国を建国したよ。
- ・昭和12年 日中戦争になったよ。
- ・昭和16年 太平洋戦争になったよ。

そのころの日本のようすは？

- ・1929年世界恐慌がおき、資源が乏しい日本は危機的状況になりつつあった。
- ・不況から脱出するために、また資源をもとめて中国へ進出。
- 満洲国建国、日中戦争になったんだね。日本が攻めたんだね。

アメリカと戦争をした。仲が悪かったのかな？

- ・日米通商航海条約の破棄により、石油を輸入できなくなった
- ・攻めたアジアの国々でアメリカと戦った。そこで多くの兵隊さんが亡くなったんだね。
- ・空襲もあった。豊橋も何度か空襲があった。6月19日の空襲で新川も被災した。

アジアの国々の様子は？

- ・多くのアジア諸国が欧州の植民地だった
- ・日本は、大東亜共栄圏の名のもと、太平洋諸国、東南アジアに活路をもとめていた
- ・欧米列強も中国を食い物にしていた

日本はアジアに国々にも攻め込んでいたんだね。

- ※ 「どうして戦争をしたのか」予想を立て、それに基づいたテーマをたて追究させる。必要な資料は教師が準備をする。

資源に乏しい日本。石油などの燃料がなくなったら日本の産業はだめになる。資源を求めて日本が戦争を始めた。日本が戦争を始めた。多くの兵隊さんも亡くなっている。当時の人は戦争に反対じゃなかったのかな？

当時の人たちは戦争に反対じゃなかったのかな？（発表＋話し合い⑩）

内地で戦争を支えた民衆

体験された校区の方に聞いてみよう。⑧⑨（聞き取り）

戦前・戦後 教育方針のギャップ

当時の生活の様子

※鈴木さん（弘文堂さん）

戦争に対する当時の考えとともに「建物疎開」をせざるをえなかった時の状況をお話していただく。

- ・軍の施設を守るための命令で仕方なかった
- ・我が家を取り壊されるのを悲しんで大黒柱に涙する人もいた
- ・情報がなく、そうするしかなかった

- ・「建物疎開」は仕方がなかったんだ
- ・国のために我慢するのが当たり前、仕方のないことだったんだ
- ・中学生でも軍の工場で働いて、国に役立とうとしていたんだ

いやじゃなかったのかな

※小川さん（師範学校在学中）

戦時中、師範学校で学んだこと。自身も兵隊に志願したこと。戦争に対する考え方

- ・国のために役に立ちたかった
- ・国のため、天皇のために役立とうと
- ・国に教えられていた
- ・当たり前のことだった

戦時下の食事を体験しよう（共通体験）⑩⑪

- ・イナゴや水団を食べていた
- ・おいしくはなかったがご馳走！
- ・配給制、ものは少なかった
- ・仕方のないことだった

※小川さんに当時の思い出をお話していただくとともに、水団とイナゴの佃煮をつくっていただき、食生活の苦労を実感させる。

※忠内さん（豊川海軍工廠）

忠内さんが体験した豊川海軍工廠の空襲の様子を聞く（ビデオ視聴）【早咲きの花もあわせて視聴する】

- ・近所の友だちが空襲で亡くなった
- ・とてもおそろしかった
- ・中学生くらいの子が犠牲になった
- ・役に立ちたかった

※忠内さんは体調がすぐれない。「戦争を語り継ぎたい」という思いで海軍工廠の空襲を語ったビデオを通して空襲の悲惨さを実感させる

何かものすごく反対って感じではなかった。「仕方がない」「当たり前だった」と言われた。なぜだろう？

なぜ「ものすごく反対」じゃないのだろう？⑬⑭⑮（一人調べ＋聞き取り）⑯（発表＋話し合い）

「軍の命令には逆らえない」と言っていた。それくらい軍の力が強くなっていた。どのようにして、どんな理由で軍の力が強くなったの？

軍国主義へ向かったのはなぜ？

＜文獻・歴史年表・小川さん聞き取り＞

- ・1929年世界恐慌をきっかけに、社会が不安定になり、独裁政治と対外侵略に活路をもとめる体制が軍部によってつくられた
- ・1931年軍部は「満州事変」を起こし、政党内閣をなくし戦争を進めていった。
- ・国家総動員法により、議会の承認なしで軍政府がものや労働力を思いのままに動員できるようになった（国民徴用令・価格統制令）
- 広く話し合いをする場がなくなり、軍部が独断で世の中のことを決めていった時代だったんだ。憲兵とかもいたらしいね。本当は反対だったけど逆らえなかったのかもしれないね。
- ・軍には逆らえない、教育も戦争一色、情報も軍に都合のよい形で、都合のよいものしか伝えられず、自ら志願して特攻隊に志願する人もいた。戦地で兵隊さんたちが、空襲で多くの市民がなくなった。人の心に大きな傷を残すのが「戦争」なんだ。

若者は「国のために兵隊になるのが当たり前」学校でそう教えられていたのかもしれない。

学校教育の様子を調べてみよう

＜校区史・学校史・文獻・小川さん聞き取り＞

- ・国民学校という名前になった
- ・教科書の内容も戦争を意識したものになった
- ・国のために戦うと教えられてきた。
- 新小川小学校の校歌「3番」も戦争に関係がある。
- 「いざや鍛えむ 強き身を・・・」いつも歌っていた校歌なら、これが当たり前だったんだね

民衆の考え方・世の中の考え方は？

- ・みんなが戦争に協力せざるを得なかった。逆らったら非国民。憲兵ににらまれる。つかまる

※小川さん

軍国主義に向かった当時の日本の様子を語っていただく。また、師範学校在学中に教えられた「教育方針」や、当時の教科書、学校のカリキュラムについて現物を交えてお話していただく。

「情報がなかった」と弘文堂さんは言っていた。市民は限られた情報しか知られていなかったのかもしれない。情報がなくてちゃんと判断できないことがあるよね。不安だね。

情報が限られるとどうなるの？

＜文獻・弘文堂さん聞き取り＞

- ・軍が民衆の意識をコントロールしやすくなる
- ・都合のいい情報で、民衆の戦争に協力せざるを得ない状況が作りやすくなる
- ・さからったら「非国民」
- 様々な不安の中、相手を倒さないと日本が占領される、自分たちも殺されると思って仕方なく協力し、また戦地に向かったのかもしれないね。

特攻って戦闘機で体当たりするんだよね。死んじやうよね。どうしてそこまでしないと決めたの？

どうして「特攻隊」ができたの？

＜文獻・梅田さん聞き取り＞

- ・特攻をしなければならぬということは、それだけ日本が追い込まれていた。何とかしたいという思いで多くの若者は志願した。

何もかも今とは全く違う。一番の被害者は民衆だ。そんな人の心に大きな傷を残すどうにもならない時代があったんだ。絶対、繰り返してはいけない。戦争や紛争のない世の中をわたしたちはつくっていきたい。でも、わたしたちに何ができるの？

平和な世の中をつくるために、わたしたちのできることってどんなことだろう。⑰⑱（一人調べ）⑲⑳（話し合い）

梅田さんはとても話辛そうだった。

弘文堂さんや小川さんは一生懸命。忠内さんは、入院中だけとお話をされていた。お話をさせていただいた方々はどんな思いでわたしたちに語ってくれたのだろう。

梅田さんはなぜ話辛そうだったの？

忠内さんは、なぜ病気なのにお話してくれたの？

※お話をさせていただいた方々の表情の違いから、それぞれの思いに迫らせる。さらに、入院中にもかかわらずお話をされた忠内さんの強い願いにも気づかせる。

- ・心に大きな傷があるんだ。辛いけど、平和を願って話してくれたんだ。
- ・過ちを2度と繰り返してほしくないから忠内さんはお話をしてくれたのかもしれないね、語り継がないといけないと思ったんだね。

日本と中国はあんまり仲がよくないみたいだ。戦争の傷跡は、中国や韓国にもあるようだ。

アジアの国々では戦争で1500万人以上の人が亡くなっているよ。

アジアの国の人たちは、

どのようにかわかっていったらいいの？

- ・日本がきちんと謝っていないから、中国の人がおこっているから、お互いもう一度話し合った方がいい
- ・お隣だし、文化交流を深めて、仲よくしていったほうがいい
- ・同じアジアの人同士、仲よくしたい

※アジア諸国に大きな傷を残していることをおさえ、最近の日中関係に関する新聞記事を見せ危機感をもたせながら、これからのかかわり方について考えさせる。

同じ過ちを繰り返さないためにも、戦争のことは忘れず、語り継いでいこう。

アジアの人と、世界の人との交流を深め、互いに理解し合えるまで、話し合っていっしょに平和な世界をつくっていこう。